

但し甲乙互に協議し過不足なき様取計うべし。

	歩兵	騎兵	砲兵	工兵	計
甲召募官	二〇四	二〇	一六	一五	二五五
乙召募官	一九〇	一九	一四	一四	二三七

三 特科兵の身幹は騎兵は五尺二寸以上、砲兵工兵は五尺三寸以上とす。
 四 家族身体証明書不十分と思ふときは日割表の期限内に於て臨時家族検査をなすことを得。

五 一戸の人員は召すべき戸数の平均を以て大^(六〇歳未満)三人、中^(六〇歳以上一五歳未満)七歳以上一七歳未満一人、小^(七歳未満)一人を目標とし採用すべし。
 但し、中一人小一人を以て大一人をなすことを得。

六 各府県毎に採用戸数及び前項に抛り大中小に区分し、人員を各兵科毎に司令部へ電報すべし。

七 乗船場に於ける人頭調査官の配置等は適宜処置すべし。
 但し、甲乙召募官へ補助として更に下士官三名(内書記一名)宛出張せしむるに付諸事命令し各股共召募官一名は必ず乗船すべし

この命令を受けた大島・酒出兩大尉は同年二月八日札幌を出発した。

大島召募官の募集状況 大島大尉は甲召募官として福岡、大分、愛媛、岡山、鳥取、島根の七県を担当して検査を実施した。

福岡、熊本は通常の召募年に当たるが、他の五県は二十六年に水害があり追加召集することになったのである。その検査施行の日程は左のとおりである。

福岡県 採用人員 歩兵六十四人、騎兵六人、砲兵七人、工兵六人

施行場所 施行月日 応募人員

推田村 二月十九日 三十六人

二月二十日 四十三人

飯塚町 二月二十二日 四十三人

第四章 江部乙屯田

福岡市 二月二十四日 三十六人

久留米市 二月二十六日 五十六人

大川町 二月二十八日 四十九人

福島町 三月四日 四十三人

熊本県 採用人員 歩兵九人、騎兵二人、砲兵二人、工兵一人

熊本市 三月二日 六十一人

大分県 採用人員 歩兵八人、騎兵二人、工兵一人

中津町 三月七日 四十人

高田町 三月八日 八人

大分町 三月十一日 二十三人

愛媛県 採用人員 歩兵三十二人、騎兵四人、工兵三人

松山市 三月十四日 十三人

今治町 三月十六日 九十八人

川の江村 三月十九日 五十六人

岡山県 採用人員 歩兵六人

岡山市 三月二十二日 八人

高梁町 三月二十四日 五人

津山町 三月二十六日 十一人

鳥取県 採用人員 歩兵五十六人、騎兵三人、砲兵一人、工兵三人

鳥取市 三月二十九日 三十七人

船岡村 三月三十日 三十人

勝見村 四月一日 三十二人

倉吉町 四月三・四日 八十二人

米子町 四月六日 三人

島根県 採用人員 歩兵三十一人、騎兵三人、砲兵三人、工兵一人

松江市 四月七日 十人

川戸村 四月十日 百五人

益田町 四月十三日 三十五人

右の区域での志願者数は一、一九三名あった。その後出願取消しもあって総受検人員は九四六名で内合格者七〇二名であったが、採

用選考を行い決定したのは二五七名であった。

検査は出願者のみでなく、予め家族中で家事に支障ないものは本人と共に検査所へ出頭し面接したのであった。

検査終了後に召募官は合格者及び家族を集め、屯田兵事業の最も困難な事を知らせるとともに志願の可否を検討し、移住後における決心を変えない固い意志を持たせる講話をしている。この内容要点は

- 1 北海道の氣候及び積雪の状況。
- 2 志願者本人の体格検査の合格したこと。
- 3 財産の片付けは採用通知があつてから取りかかること。
- 4 移住地は大木鬱蒼として万事不便であること。
- 5 北海道の開墾は内地の農業に比べ最も困難であること。
- 6 心なき婦女子をすすめて移住しては後悔すること。
- 7 屯田兵移住は扶助年限に限らず永久土着を覚悟すること。
- 8 北海道において職を失えば人家が少なく生活の道が得難いこと。
- 9 戸主は兵役の義務があるので、家業は戸主を頼らず家族が家業をする覚悟が必要なこと。
- 10 扶助満期後は自活しなければならず、扶助期間中に給与地を全部開墾する必要があること。
- 11 余力があれば給与地のほかに土地貸下を願ひ得ること。
- 12 屯田兵幹部の監督及び干渉があること。
- 13 手荷物に雨具、防寒衣類を用意すること。
- 14 在来の農具、夜具のようなものは売らずに持っていくこと。

などの話をした。が志願の取消しを申出た者は各検査場に一人もななく志願の意志が堅く、また屯田事業の予備知識や理解を得られていたかがうかがわれる。

酒出召募官の募集状況

酒出大尉は乙召募官として二月八日札幌を発ち、岩手、千葉、茨

城、宮城、福井、石川、大阪、和歌山、徳島、高知の各県を検査した。その検査施行の日程などは次のとおりである。

千葉県	採用人員	歩兵二人、騎兵一人、砲兵一人	施行場所	施行期日	応募人員
				二月十五日	二人
				二月十六日	三人
茨城県	採用人員	歩兵五人、騎兵二人、砲兵一人	仙台市	二月十九日	一人
			石巻町	二月二十日	二人
岩手県	採用人員	歩兵八人、騎兵一人、砲兵一人、工兵一人	一ノ関町	二月二十二日	一人
			花巻町	二月二十三日	一人
			盛岡町	二月二十四日	一人
福井県	採用人員	歩兵二十八人、騎兵二人、工兵二人	福井市	三月四日	三人
			大野村	三月六日	一人
石川県	採用人員	歩兵六十人、騎兵二人、砲兵二人、工兵二人	大聖寺村	三月八日	七人
			小松村	三月十日	二人
			松任村	三月十二日	一人
			津幡村	三月十四日	六人
大阪府	採用人員	歩兵六人	大阪市	三月十八日	二人
和歌山県	採用人員	歩兵三十八人、騎兵四人、砲兵三人、工兵三人	和歌山市	三月二十一日	七人
			御防村	三月二十三日	二人
			田辺町	三月二十四・五日	一九七人
徳島県	採用人員	歩兵二十五人、騎兵二人、砲兵二人、工兵一人	索川村	三月三十一日	一人
			富岡村	四月二日	七人
			日和仇村	四月四日	二人

高知県 採用人員 歩兵十八人、騎兵五人、砲兵四人、工兵四人

高知市 四月九日 六六人

高岡市 四月十一日 九〇人

中村 四月十三日 一三人

以上の各府県の志願者総数は九三九戸に達したが、応募者は七〇〇人、実受検者六七八名であった。このうち合格者採用決定は二三八名である。

乙召募官の酒出大尉も志願者の去就に対する態度を決意することを促す講話を甲召募官と同主旨の内容をもって行っている。

両召募官は四月十三日全区域の検査を終了し、その採否を決定してそれぞれの志願者に通知した。

甲地区における採用区分は歩兵二〇六人、騎兵二〇人、砲兵一六人、工兵一五人、乙地区は歩兵一九一人、騎兵一九人、砲兵一四人、工兵一四人となり、江部乙屯田の歩兵は三九七人と三人の不足となっているが、転嫁下士として三名の志願採用があり四〇〇人となる。また、愛媛、大分県が各一名減、福岡県に二名減、高知に一名増、佐賀、鹿児島から六名採用などの調整が行われている。

第二節 江部乙兵村の受入準備

土地区画 明治二十七年の屯田兵移住は滝川村字ユーベオツに決定し、その受入準備が進められた。しかし、この位置決定や土地区画測量、兵屋の建築着工・設工年月日については江部乙町史に記載されていないし、その他の資料でも得られず判然としていない。

第三次屯田入植計画では石狩川沿いに入植させる前提があったので、既に決定していたとも考えられるが不明である。

この種の取扱いとして通常の例から推測する限りでは、二十六年春か又はそれ以前に測量が行われ、秋口から翌年の屯田入植までに間に合わせる兵屋建築整備がなされたものと考ええる。

兵村の設置については「ユーベオツ」の字名設置が「滝ノ川」と同時に明治二十六年十月七日付告示第六七号で示され、「滝ノ川」を界に北はユーベオツ川（江部乙川）までとなったところをみると、兵屋建設のために区域分離を行い名称を付ける必要に迫られたのではないかと思われるのである。

江部乙兵村は字ユーベオツに上川道路を基幹として東西に広がり九丁目から十五丁目に至る区間に兵屋が建築された。

この工事についても資料はないが、恐らく屯田兵屋の請負を一手に握り三十一、二年までも大倉組が手がけているところをみると江部乙屯田兵屋も大倉組の手になったものと推測される。

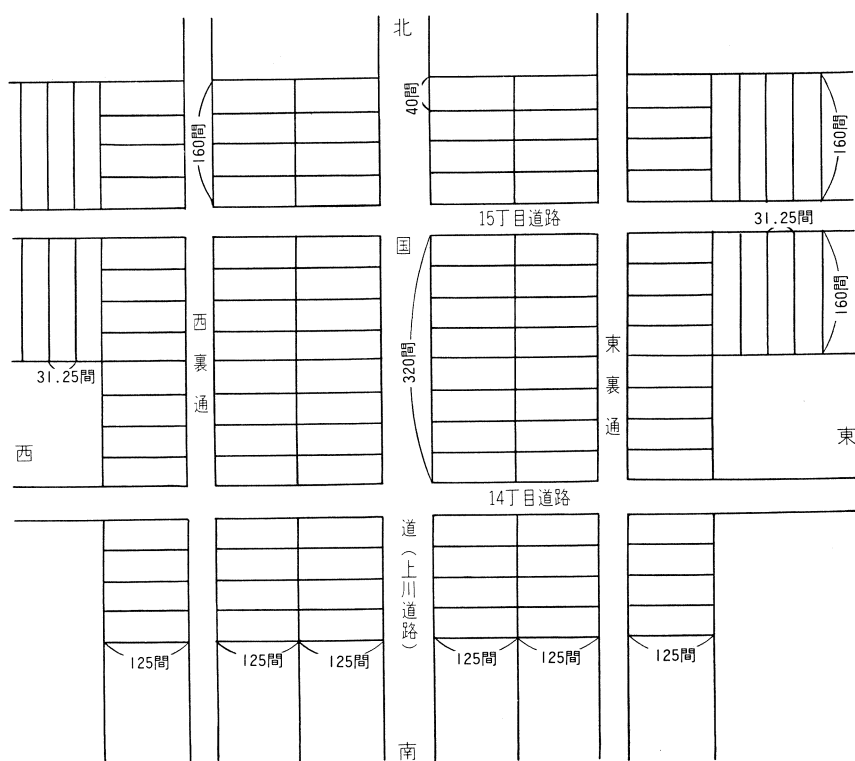
土地区画については滝川兵村と同様に一戸五、〇〇〇坪割の粗居法を採用している（注 粗居法・密居法については滝川屯田の項参照）。

ただし異なる点をあげれば滝川は「通」に当たる区画割が少ないのに対し、江部乙は大半が通り方式である。

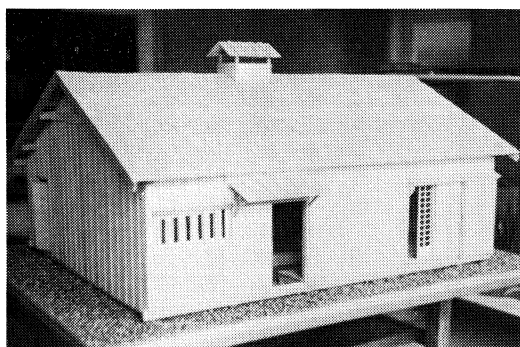
すなわち次の図に示すように南北に走る上川道路（現国道十二号）を基準として併行する「東裏通り」「西裏通り」と称する二本の道路をとり、これに間口四〇間、奥行一二五間、面積五、〇〇〇坪に割った区画を多くとっているのである。

反対にこれらの道路を三二〇間ごとに横断する道路(丁目)をと
り、この丁目道路に面した間口三二間二分五厘、奥行一六〇間の
五、〇〇〇坪割は少なく、東西九丁目、東十丁目、東西十五丁目
のみ採用した土地区画となっている。

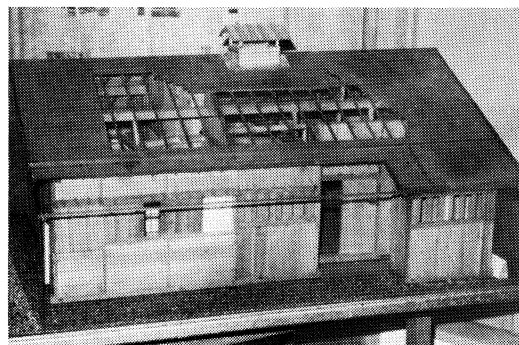
江戸乙屯田の場合は耕地番号と住居番号は一致しておらず、住居



江戸乙屯田兵屋の模型



兵屋模型 (1)

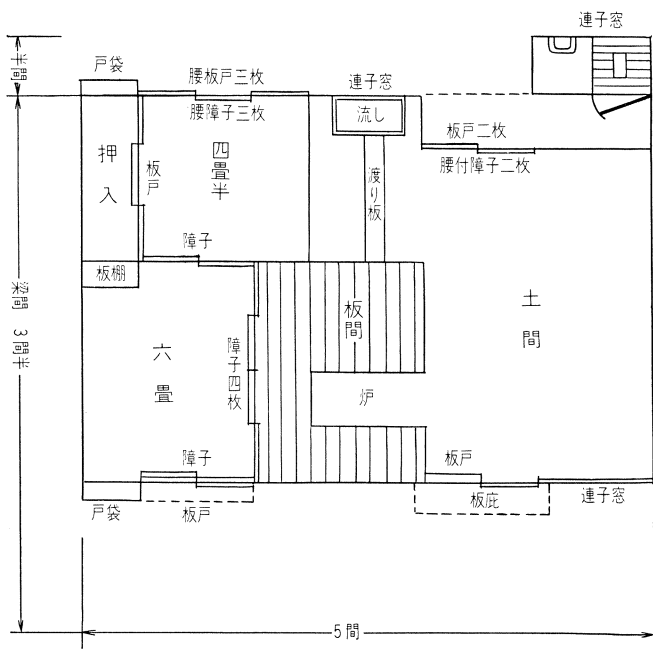


兵屋模型 (2)

番号は滝川北兵村の次の番号から追番となる。すなわち住居は四四
一号から、耕地は七〇九番地からである。南地区に当たる当初の第
二大隊第五中隊は四四一番から六四〇番を国道の両側を南から北に
番号を付し、東裏通りに移り北から南に進んで次は東九丁目を西か
ら東方へ、続いて東十丁目を東から西に向かい、終わって西裏通り
の南から北へ、そして西九丁目の東から西に付番される。
第六中隊の北兵村は六四一番から同様な付番となり、西十五丁目
の西側で八四〇番となっている。

兵 屋 江戸乙屯田兵屋は滝川屯田兵屋と多少異なっている
ところがある、というのは建坪が一八坪になっている。

基本構造については琴似屯田に変わらないが便所の位置が飛出し
た形となって、滝川屯田兵屋より〇・五坪分だけ広くなっている。



江部乙屯田兵屋平面図

この形態については他に茶志内、南湧別などもみられ、機能的に多少異なるが一八坪の兵屋のあるのは納内、高志内、北湧別、秩父別、土別、上中野付牛、一巳などで、第三次入植計画による江部乙以降にこれらの構造がみられる。

桁間五間、梁間三間半の一七坪五合に便所五合の計一八坪の建坪で、造りは平屋木造、桎板葺屋根、間取りは滝川兵屋と異なるのが勝手で土間となり、板の間から踏板が流しまで渡されている。

畳数は四畳半（一間半の押入付）と六畳の二間であり、六畳板間に炉付と土間は六坪と裏口外の一坪及び勝手一坪半の間取りである。

兵屋の建築も終わり諸給与物品の調達準備をすることになるが、既に屯田兵移住給与規則に基づき官給品を調べ、また屯田志願者には心得書による周知されているとおり準備がなされた。

給与米などは入札により購買されておりこれをうかがえるものとして官報に次のとおり記載されている。

- 第一号 一玄米 八百石 空知郡滝川村宇ノベオツ 屯田兵第二大隊官庫納
 - 第二号 一玄米 三千六十八石 上川郡永山村屯田歩兵 第三大隊官庫納
 - 第三号 一玄米 四百八十二石 同郡旭川村同
 - 第四号 一玄米 四百七十四石 同郡永山村宇当麻同
 - 第五号 一玄米 二百八十石 空知郡沼貝騎兵隊官庫納
 - 第六号 一玄米 二百二十石 同郡同村屯田砲兵隊官庫納
 - 第七号 一玄米 二百四十石 同屯田工兵隊官庫納
- 此入札保証金各自見積代償百分ノ五以上
- 右競争入札ニ附シ購買ス望ノ者ハ本月二十一日ヨリ執務時間中当部ニ就キ標本米入札心得書契約書案等熟覽ノ上本月二十八日午前十時マテニ満二箇年以來引続該營業ニ従事スル市町村長又ハ郡区戸長ノ証明書ヲ添ヘ入札保証金ト共ニ入札書差出スヘシ同時開札ス 此契約ハ屯田兵監督部長久保田重直担当ス
- 明治二十七年五月十二日 屯田兵監督部

第三節 江部乙屯田兵の移住

第三次屯田入植計画の第三年次に当たる明治二十七年の召募決定があり、この年度の移住は五〇〇戸で江部乙屯田歩兵に四〇〇戸と沼貝（美唄）の騎兵・砲兵・工兵に一〇〇戸の移住が行われた。

移住者は指示により諸準備を終り、指定の期日までに定まった港に集合して待機しなければならぬ。その県を去るに当たって各府県知事は一場の訓戒とともに歓送の辞を贈り、激励することが行われたのである。

先祖代々その県の住民であったものが一度に大勢して去って、帰ることのない別れとなる。しかも国の守りとして北海道に渡り開拓に赴くのであるから県としてもまた郡町村としても懇篤な歓送となった。去る者も送る者も無限の感情が胸底に湧き出るのは当然のことであった。

この移住民は船の都合で三回に分けて渡航されている。すなわち明治二十七年四月二十七日神戸港を出帆した第一船「日の出丸」（注 一三〇〇トンといわれる）から第二船「金沢丸」（注 五〇〇トンといわれる）、第三船「日の出丸」の五月十六日に小樽港上陸までの約二十日間にわたる渡航である。

第一船日の出丸 第一船の移民県・航路は次の表に示すとおりである。

乗船者県	乗船地	派出員	乗船者県	乗船地	派出員
徳島県 大阪県 岡山県	神戸港	三浦軍医 酒出大尉 鈴木書記	愛媛県 大分県 鳥取県	今治港 門司港 境港	谷 曹長 三浦 軍医 遠藤 書記

第一船の出発は神戸港から四月二十七日午後七時三十五分に愛媛県の今治港に向かった。それまでに三県の移民者は待機していることになるが、遠方からの者はそれまでに二、三日を要している。

大阪府民は四月二十六日午後三時に、岡山県民は同四時に神戸港に到着した。四国徳島県からは二十五日に徳島古川港に参集して一泊、翌四月二十六日午前三時に起床して早晩乗船の予定が潮流急で着港できないため用船那賀丸を徳島に入港させ、移住者を徳島に移して乗船させた。その後津田港に寄り神戸港には二十七日十時に着いた。三県移住者が日の出丸に乗船入帆できたのは午後七時三十五分になった。

次の寄港地は愛媛県今治港でここでは移住事務所が設けられており、四月二十一日から二十五日までに諸給与を終らせ二十六日には今治港に全員集合していた。

同月二十八日午前八時三十分今治港沖半海里（注 一海里一、八五三メートル）に着いた日の出丸に解で乗船、愛媛県移民は県から手拭・木綿反物を贈られたという。午後三時出港して次の寄港地門司に向かった。

門司港には二十九日午前四時三十分着港、大分県移住民を乗せて午前十時に出帆して次の鳥取県境港に向かった。

境港では一海里沖に三十日午前五時五十分に投錨した。鳥取県は水害の多い土地で道路整備が悪く、移住民は荷物を加露・橋津・赤崎

の三カ所から船で回送してもらい、移住民は郡書記の引率で歩き二十八日午後には境港に着き、二十九日には八幡神社境内で県知事代理の口演、激励を受けた。三十日正午から点呼を開始し舛八艘で乗船午後二時三十分出港した。

この第一船の江部乙屯田関係には岡山六戸、大阪・愛知六戸、愛媛三戸、徳島二五戸、大分七戸と島取五六戸の各府県屯田家族計一三一戸を乗せ日本海を北上して小樽へと航行した。

無事小樽に入港したのは五月三日午後一時で四時までに上陸を終り、その日は小樽に泊った。

第一船移住屯田兵の県別氏名は次のとおりである。

第五中隊に配属された者 合計五十三名

鳥取県 二十二名

安藤 亀藏 操上 象藏 梶本 善藏 中野 常藏
 宮脇 久藏 安達 又市 小井手亀藏 小島吉太郎
 岡村慶次郎 浅井 安藏 平尾 伊藏 地原松之助
 田原 茂 松原 和藏 長田 長藏 伊藤 沢藏
 岡本亀次郎 矢部 道藏 前田 亀吉 東地 千藏
 寺岡 幸吉 山本 虎藏

徳島県 十七名

木下 由也 吉本茂五藏 木村 常吉 次原 麻一
 北森元三郎 宮川 善助 吉田友太郎 小島市太郎
 津川 栄一 中尾 半藏 平山丈太郎 三笠 総八
 臼杵喜一郎 山脇与四吉 長江 政藏 殿川与三松
 城畑京太郎

愛媛県 七名

宮内林太郎 河村弁太郎 竹内 兼吉 高橋久我次
 大下 松吉 石川 近次 明地藤三郎
 大分県 三名

第四章 江部乙屯田

武久惣次郎 生野 貞一 大塚喜太郎

岡山県 二名

森定 荒吉 安東 小一

大阪府 一名

大谷平太郎

愛知県 一名

長瀬富次郎(応募は大阪府に寄留しており記録には大阪府)

第六中隊に配属された者 合計七十八名

鳥取県 三十四名

吉田 亀吉 石本 市藏 磯江千代藏 岩本 為藏
 上島 周吉 松井 仙治 岡本 岩藏 原田 馬吉
 小林 春彦 林 正一 加藤 峻藏 大久保久太郎
 中西 長藏 小井手熊藏 森 嘉藏 古井 政藏
 石井長太郎 藤原 信吉 大橋 政藏 高田 林藏
 浅田 亀吉 浅田 栄藏 石井 寅藏 杉本 菊藏
 前田 綱吉 前田又三郎 森田亀太郎 岩本 延藏
 松田 角藏 村上 米藏 矢部重太郎 家納 亀藏
 田村 柳藏 齋木 延治

徳島県 八名

松田 儀一 埴淵 平八 三好 直作 丸岡繁太郎
 長井 慶重 浜 幾太郎 松田 松藏 榎本 友吉

愛媛県 二十四名

村上喜忽治 森実静一郎 月原李右衛門 村上勘左衛門
 東倉亥之助 石川栄太郎 中村 俊正 田所 宗治
 鈴木 丹治 星川 辨吉 長野市太郎 長野 百藏
 鈴木武三郎 河村 兵吉 星川 半助 鈴木伊三郎
 林 峰太郎 越智 吉次 浮穴 鶴造 村上林左衛門
 越智喜代治 越智嘉平太 石川岩太郎 長野岩太郎

大分県 四名

小野田久吉 藤沢 静雄 島津勇次郎 房前 佐助
 岡山県 四名

第四編 屯田兵制

横林 吟藏 芦田末三郎 高谷千代太 岩佐 駒藏

愛知県 四名(大阪府寄留として応募したため記録は大阪府)

松本久太郎 佐々木乙次郎 長谷川竹藏 林竹次郎

第二船金沢丸 第二船は金沢丸でその移民県・航路などは次の表に示すとおりである。

乗船者県	乗船地	派出員	乗船者県	乗船地	派出員
千葉県	横浜港 (当初は東 京の子定)	加藤軍曹	和歌山県	神戸港 (現三 国港)	渡辺軍曹
茨城県		福井県	南波軍曹		
高知県	神戸港	竹内軍曹	石川県		

千葉県と茨城県の屯田家族と歩兵第十九連隊からの移住下士一名を、当初は東京港から出港する予定で品川に五月一日までに集合させたが変更して、横浜港から五月二日午後三時三十分(現三)に神戸港に向けて出帆した。

神戸港ではさきに大阪・岡山・徳島の府県が出発しており、二船目は高知・和歌山県の移住民である。高知県民は五月一日午後三時浦戸港から土州丸で一部を乗せ、次に同五時二十分須崎港に寄り、五月二日午後二時二十分に神戸に着いた。和歌山県では青岸港に集まり三日八時に出て午後二時に神戸に着いて、各々待機していた。四日の早朝に入港予定の金沢丸は夜来の大雨のため遅れ、午後三時に入港、出帆は夜の十二時になり福井の坂井港に向かった。

坂井港には五月八日午前一時に入港、待機していた石川県・福井県の移民九〇〇人は午前八時から乗船、十一時に入帆して小樽港に向け北上した。

この第二船の江部乙屯田関係には福井二八戸、石川四四戸、和歌

山三八戸、高知一九戸、千葉二戸、茨城五戸、富山一六戸の屯田家族計一五二戸を乗せて来道している。

無事小樽港に入港したのは五月十一日午前五時で七時に上陸している。この第二船の様子について江部乙屯田家族として来住した「吉沢甚右衛門の書簡」によりうかがうことができる。

明治二十七年五月十一日午後四時北海道小樽港色内町十五号ノ内新瀉屋本名本間ケン方 吉沢甚右衛門

石川県能美郡吉原村字下吉谷 吉沢甚次郎様 急報

拜啓 去る八日午前十時に汽船金沢丸に乗り、同十一時五十分(現三)に抜錨致しました。この船は五〇〇トンと言うから和船に比べると大きい方で、船の中は甚だ静ですが、もともと屯田兵だけに用いるもので、客室の二段造りを四段にこしらえ、二千人ばかりの人数と荷物をつめ込んだため、からだはかがめたまま腰をのびすこともできず、日中でも灯りをともして物を探す有様でした。

殊は不仕合せにも下段左下の隅に場所が当り、さながら別世界にでも入った心地が致しました。余り悪い場所であるためかたわらにほんの少しの空気があり、そのお蔭で幾分か呼吸を助けたように思われました。妻は八日乗船の時、皆といっしょに昼食はしましたが、夕食から十日の昼食まで絶食、その他の者は少々宛は食事を摂り、十一日の朝にはほとんど回復し、同日午前五時・無事に小樽港に着き、七時に上陸致しました。(中略)

小樽の街は焼跡に建った金沢町の建振りで、詳細は後からお知らせ申します。今日は午前九時三十分朝飯、午後三時十分昼食、明日の朝飯は持弁当として午前三時に汽車に乗り直ちに滝川村へ着く筈で、上陸の際くじりを致しました所、私は四百五十七番に当りました。この位の余裕はありましたが、疲れたのと其の他万端の用事のため詳細は書きかねます。

どうぞ御からだ御保養下さい。五月十一日午後四時三九分

(注) 吉沢甚右衛門は石川県能美郡吉原村字下吉谷の人、異父弟甚之助(二〇歳)を戸主として屯田志願させ、本人三九歳で家族四人と甚之助の弟を含め七人家族として来住、故郷との通信は詳細に当時の模様を伝えている。

第二船移住屯田兵の県別氏名は次のとおりである。

第五中隊に配属された者 合計七十二名

福井県 十三名

木下 藤助 替地 浅吉 多田 力蔵 福永伝兵衛
加藤 仁市 野尻 京松 平沢 末松 中沢熊太郎
白新田恒太郎 沢 市松 村井八百吉 上山弥三郎
岩崎 初吉

石川県 十九名

太田 作松 林 新助 吉田初三郎 吉沢甚之助
今井由太郎 加藤 五郎 本所久太郎 中田弥三次郎
山越源三郎 大村初三郎 木下 由松 山城 浅吉
大川与三吉 大西駒太郎 東藤庄次郎 長永権太郎
北本 为一 坂口 興三 水上養太郎

和歌山県 二十四名

山本 政吉 楠本 友吉 松本 秀七 山本源之助
池下 千松 榎本 金蔵 清水 庄八 中村 為吉
東 万六 岡田 新吉 立石安右衛門 堀 森之助
数坂 広吉 上村 義衛 玉田 秋吉 前田 薰
森下佐五郎 坂井 兵助 笠松貞之助 和田 与助
安宅 一郎 堤 竹蔵 寿美沢次郎 中瀬 昌孝
高知県 十二名
竹村 二一 高橋藤太郎 武田 信孝 西村 鹿次
野町 正徳 谷 藤吉 池田弥寿馬 大崎 鶴吉
竹崎 柳馬 森田丑太郎 矢野 虎吉 野並長次郎
(右のうち武田信孝は転嫁下士として志願し屯田兵採用)

千葉県 一名

吉野 豊一

茨城県 一名

近藤 颯

富山県 二名(石川県に寄留して応募した)

三谷 安吉 大原久太郎

第四章 江部乙屯田

第六中隊に配属された者 合計八十名

福井県 十五名

山口 秀松 内田 豊 水坂 嘉蔵 大道 寅松
亀井 勇松 寺本 末吉 島田与三松 増水 春吉
吉田 元吉 辻井 興蔵 中林 栄吉 森下 弥平
伊藤 与作 木下鉄五郎 布川 松野

石川県 二十五名

山崎金六郎 高井忠太郎 窪田 吉松 山本 専多
中島長太郎 安村与三郎 山根 喜助 羽柴初三郎
佐々木徳松 田中 栄松 中島辰五郎 徳田与三郎
千徳与三松 吉田与三松 長田権次郎 谷口 久松
本吉 与平 中野又次郎 千田仁太郎 北山 伝八
河崎辰次郎 川上市太郎 鈴木 仁 覚元 久松
上坂恒吉(右のうち山崎金六郎は転嫁下士として屯田志願)

和歌山県 十四名

田中 茂昭 森本市太郎 玉置 栄吉 浜中 吉松
山本利平次 上村菊五郎 本谷万太郎 小森 佐平
玉置 藤吉 溝端 岩楠 広田盛之助 稗田 吾市
須合銀五郎 田野円次郎

高知県 七名

依岡重太郎 本山鹿太郎 浜田 一 岩戸 斧吉
大崎国太郎 淡中喜太次 川村 権吉
(右のうち依岡重太郎は転嫁下士として屯田兵志願)

千葉県 一名

星野養太郎

茨城県 四名

北村 一 小橋徳之助 野上 午吉 助川 捨松
富山県 十四名(石川県に寄留して応募した)

寺崎竹次郎 本元竹次郎 大崎 恒吉 武田九郎三郎
高見 栄吉 大原幸次郎 虎谷竹次郎 紙谷 佳成
西田栄次郎 黒田嘉藤次郎 石川金次郎 江幡栄次郎

河上金次郎 川岸久左衛門

第三船日の出丸 第一船で移民を送り、直ちに第三船として廻航した日の出丸の移民搬送経過は次のとおりである。

乗船者県	乗船地	派出員	乗船者県	乗船地	派出員
福岡県	博多港	大島大尉 三浦軍医 遠藤書記	宮城県	青森港	加藤軍曹
熊本県					
島根県	浜田港	橋口軍曹	岩手県		

福岡・熊本両県移民を乗せるため日の出丸は五月九日午前七時に博多港沖三海里に投錨した。既に七日博多鰯町に移住事務所が開設されており、両県属・書記により移住民を引率して博多に着き待機していた。出港予定を十日と定めてあり、八時までに荷積み、その後人員調査があつて乗船して午後六時に出帆、島根県浜田港に向つた。

浜田港には十一日午前十一時三十分に入港、ただちに島根県移民を乗せ午後四時に出帆して最後の寄港地青森港に向かつた。

青森港からは宮城県・岩手県移民が乗船するため五月十三日午後に到着していた。当初は十五日午前十時の出港であつたが、配船が早くなつたので、にわかになつて十四日午後に変更して五時二十分に出港となり小樽に向かつた。

この第三船の江部乙屯田関係者は福岡六二戸、熊本九戸、佐賀五戸、鹿児島一戸、島根三一戸、宮城一戸、岩手八戸計一一七戸の屯田家族を乗せて来道している。

無事小樽に着いたのは五月十五日午後八時で、入港時間が遅く暗

いために翌十六日朝四時から上陸している。
この第三船をもって江部乙屯田四〇〇戸の来道渡航が無事終了したのである。

第五中隊に配属された者 合計七十五名

福岡県 四十二名

寺崎和三郎	大久保小太郎	元村 勝藏	羽野棟次郎
渡辺弥曾藏	古賀吉次郎	原中 倉吉	津留崎平太郎
中村 芳松	角田 熊吉	中野 敬作	山口 彦八
奥平 剛三	緒方興三郎	江上国太郎	鬼頭 健治
吉良 義人	平田 音吉	岡藤藤次郎	奥本 実藏
浅井次郎七	福住関次郎	藤田 利一	進藤 島吉
壮崎愛次郎	福井 吉弥	篠原富次郎	黒田 策一
緒方 貞次	平塚 進藏	平野 笹市	中川原伍平
中村 寅藏	遠藤 清	本壮 幹一	佐々原一夫
一木百太郎	井上松次郎	松尾音三郎	石橋伊勢吉
井上亀太郎	高崎茂一郎		

島根県 十六名

石田源一郎	船津源太郎	三沢 翼	中西又五郎
湯沢 友吉	赤松 松一	大屋四郎兵衛	中島 伊吉
串崎 梅一	川部 利作	三沢貫之助	渡辺熊太郎
山本 熊一	田上伊太郎	大段 種市	小川 邦市
山口 武一	陣副 勝一	江口弥和太郎	

(右のうち山口武一は転嫁下士として屯田兵志願採用)
(佐賀県 三名(熊本県に寄留して応募))

岩手県 六名

中村 清	川村 次楼	鎌田 藤吉	菅 梅五郎
高木源兵衛	藤村 福松		
鹿兒島島 一名(熊本県に寄留して屯田兵応募)			
橋口年松(転嫁下士として屯田兵志願採用)			

熊本県 七名

西田松太郎 安田 一男 岩橋 浅次 森松丈太郎
 中山仙太郎 香山 輝夫 平田奎太郎
 第六中隊に配属された者 合計四十二名

福岡県 二十名

村井 弥門 横田定太郎 前田惣七郎 後藤 震児
 渋谷 良二 田中金太郎 樋口 虎吉 江口幸太郎
 大隈初太郎 垣本 太郎 実藤磯五郎 梅野 種吉
 井上新太郎 平野桑太郎 海田梅太郎 宮脇 長吉
 田中喜代助 大久保岩吉 小田久太郎 豊丹生真太郎

島根県 十五名

佐藤啓之丞 田中 波一 増野 愛人 今田甚四郎
 山崎 房一 本山円四郎 青木 三吉 右田 紋市
 舟津 金一 平野 熊市 三好 庄太 早弓菊一郎
 山崎作太郎 古川 孝彌 吉岡 竹市

岩手県 二名

菊地石太郎 古枝 鉄弥

宮城県 一名

川村 儀蔵

熊本県 二名

福島 米吉 佐藤 熊太

佐賀県 二名(熊本県に寄留して応募)

松尾 嘉八 江口团四郎(江口は転嫁下士として屯田志願)

以上の屯田兵移住により第五中隊二〇〇名、第六中隊二〇〇名となり計四〇〇名とその家族を含め一、七八八名が移住した。ただし、このほかに将校下士がおり、これをもって兵村が設置されたのである。

移住民の航海中はその待遇に充分意を用い、一日一回は必ず茶菓子を出し、客室には常に事務員及び小使などを配置して不時の出来事あるいは用事を達するように便宜をはかり、甲板上には保護監督

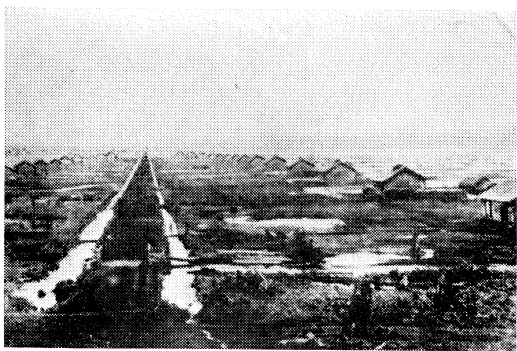
者を置くなど用意周到な処置をとって老人や小児をいたわり、又は毎日風呂を立てて入浴させるなどであった。さらに各府県ではほとんど引率者に県属をつけるなどの配慮がなされ、平穩無事に航行を続けることができたのである。各船ともに病気にかかる者はなく、ただ第一船に関節リウマチスを病める者が一名あり、第三船に乗船後間もなく島根県移民者の中に産産者一名があっただけであったという。

江部乙屯田の上陸・兵村到着

江部乙屯田兵とその家族の移住は三船によって順次小樽港に着き上陸し、手宮駅から汽車で空知大駅に降り歩いて滝川村番外地・滝川屯田兵村を通り江部乙兵村に入った。

第一船日の出丸が入港した五月三日は朝から強風で波が荒かったが大型艀舟四隻を使って無事上陸を完了したのが午後四時である。

上陸者は各兵科に分かれて兵屋番号を抽せんして宿舎に分宿したが、上陸に際して地元小樽の警察官七・八名が埠頭に出て、移住者中の老・幼・病人などの保護に当たってくれた。また、荷物は荷揚げ人夫により移住民の上陸後に引き続き陸揚げを開始したが、途中で近くの手宮裏町に火災が発生



江部乙兵村

して一時中止され、翌四日早朝再開して午前六時に荷揚げが完了した。その日は小樽滞在となっている。

小樽からの出発は五日午前四時五十分、手宮駅から一台車に五〇名近い移民を乗せた汽車で北上することになるが、当日はあいにく雨となり無蓋車のため傘をさして乗車・岩見沢に着き覆をかけ、二組に分かれて搬送され午後零時三十分と一時五分に空知太に着いた。

空知太駅は二十五年二月に開駅されたので、滝川屯田移住民が市来知から滝川兵村まで歩いた事に比べ、はるかに早く楽に到着したものである。

空知太に着くころには空も晴れ渡り大隊本部から副官や下士数名とそれに村戸長代理・駐在巡查などの出迎えを受け、村内の家々には国旗を掲げ・路傍には湯をいやし労を慰める冷茶や水も用意して、入地を祝福して丁重な歓迎の意が示されていた。

移住民は下士官の引率により四組に分かれた江部乙兵村に向かった。兵村入口には将校、下士に滝川兵村から代表した古参兵が新屯田兵誘導兵として出迎えており、人員表によってそれぞれ担当区分を行い、入屋前の手続きや人員の照合、取調べ・入屋後における必要な訓示をして各班長に引渡された。

班長は誘導兵を指示して各々を入屋させた後、諸器具及び食事の分配所に案内し、器具・夜具及び食事の分配などがあってこの日の諸用務完了は午後九時であったという。

移住屯田家族に対する給与品は規則に定められ、その内容については滝川屯田と同様で大差のないものである。給与品の分配にあつ

ては軍吏の指導監督により給与分配所は各中隊とも事業場をあて食事支給は学校敷地に設けられた炊事場で行われたのである。

班長は食事伝票を調製して各員に交付しておき、食事分配時まで班長が監視と分配のため到着しており、屯田兵が各自容器を持参して食事分配を受けたのである。

第二船金沢丸は五月十一日小樽着・翌十二日午前四時五十分手宮発の台車二一両連結の汽車で空知太に向かった。当時の汽缶車は力が弱く厚別附近で二回に分け野幌に着いたが、その後は順調で第一船時より早い午前十一時十五分に空知太に到着している。

出迎えや滝川村内の歓迎は第一船同様で、諸用務終了は午後八時ごろであった。

第三船は五月十五日小樽入港、十六日午前六時三十分上陸終了で小樽出発は十七日午前四時五十分発の台車一六台連結で第二船とほぼ同様の到着内容である。

移住民の兵村到着後の指示及び訓話内容は次のようなものである。

- 1 気候の変化についての注意
- 2 患者受診のこと
- 3 雑草及び菌類を食わないこと
- 4 火気注意のこと
- 5 所属部隊の名称及び給与班別のこと
- 6 所属武官の階級のこと
- 7 兵員及び家族の敬礼のこと
- 8 野火予防注意のこと
- 9 宅地風致を維持する樹木を伐採しないこと
- 10 給与地内白楊及び桑樹は貴重な植物に付伐採しないこと
- 11 日用品買入れの注意

- 12 苗木及び種物に就いての注意
- 13 農家経済の概要
- 14 本道風俗の概要
- 15 金銭の貸借を当分禁止すること
- 16 学校及び墓地の位置のこと
- 17 下水槽並に風呂場に関する注意
- 18 伐木法及び開墾の順序作付等に関する概略の注意
- 19 各自の決心についてのこと
- 20 家族の心得等のこと

移住者の疾病状況 移住当時における移住者の疾病に関する統計には次のようにある。

病名	隊号		病名	隊号	
	第五中隊	第六中隊		第五中隊	第六中隊
消化器病	三〇	二九	血行器病	四	四
呼吸器病	二六	一六	泌尿生殖器病	二	一
眼病	一〇	一四	耳病	一	一
炎症病	三	一	全身病	一	一
間歇熱	八	七	囊腫	一	一
外傷	二	一六	その他	一六	八
神経系病	四	四			

屯田移住者談話

木下シノ（屯田兵妻女）談 国は石川県です。石川から大分来しました。小樽から空知太まで台車にてテント張ってそれに乗せられて、四丁目の大隊のところで昼食して、何でもここに二時ごろ着きましたとか、今の役場（注 現消防支署）のところに米倉や何かあって、色々なものが渡されました。

兄が二一の年でした、私は一四、姉が一八でした。兄の嫁さんと四人で父も母も亡くなっていました。入ったのは十丁目で、小樽

につくと紐のついた札をひかされて、それが入る家の番号でした。私達は五十番番かでした。

五月五日に着いたとき家の裏にまだ雪がありました。お茶がないでしょう、だから川ぶちへ行つて川柳の葉をとってきて、鍋に入れていってね、ゴザに広げてもんでね、それを中隊長に飲ませました、柳の葉も長いのではなくて丸い葉の方です。（以下略）

佐々木ヨツ（屯田兵妻女）談 石川県から来ました。実家は水田と畑を作る百姓でした。私は兄と母親と私と三人でしたから、ひどいめにありましたよ。（中略）

この辺は真暗い藪でした。大工の通ったという細道が一本あったきりです。入った次の日外へ出てみたら隣が四国の人だといいました。その人達は私達より五日前に来たんだといっていました。その人達五日に入り、私達は十二日、そのあとの人は十七日に入りました。四〇〇戸の人ですからね。

内地では小松というところで泊り、大聖の川船に乗つて四国へ出て、そこで船に乗り三日三晩で小樽にあがったの、小樽で泊ったかどおかはつきりしないが泊つたでしょう。

小樽から台車で途中で後戻りしましてね、空知太についてあそこから歩いて来ました。そして事業場というところへ色々な物ももらいに行ったの、そしたらお祝に小豆めしをつくつてね、大きな鯨一尾づつもらつて、おひつやら何やらもらつて来ました。

鋸や鍬はあとで、そのときは布団とか茶わんとかね、鍋も三つその晩に使うものももらつて来たんです。

米は古い玄米なので、ついても白くなりませんでね、白は六軒に一つあたりました。それがつけんのですよ、杵は兎の餅つくようなあれでなく柄のついたのです。米が飛ぶのでね、白の中に縄を輪にしたのを入れてね。(以下略)

山本宗平(屯田兵家族)談 私は和歌山県から参りました。二十七年に兄の屯田兵の家族として来ました。田奈辺の近在でしたから、そこから船で和歌山に出まして、一晩泊りました。

屯田兵に行くというので県令さんが、和歌山城内を見せてやれといわれて、城内を見まして、翌日船で神戸に行き、そこで滞在して千葉や茨城県の移住者をのせた金沢丸という船が来ましたので私たちは高知県の人達と一緒に神戸でそれに乗りました。

瀬戸内海を通過して下関から日本海に出て、越前の三国港に入って石川・福井と富山の人達を乗せまして、一路小樽へ来たわけです。

私の国から四〇戸ほど来ましたが、峰延の砲兵と茶志内の工兵と美唄の騎兵とですから、こちらの歩兵に來たのは三七戸くらいでした。兵課は検査のときにもう決つてしまったのですが、どこに入るかは小樽に入ってからくじ引で決りました。私の村からも八戸ほど来ましたから割ににぎやかでした。それで村の者はよくつき合いました。

五月十一日の朝小樽に着きましたが、海が荒れましてね、私達は子供でしたからそうでもなかったのですが、大人達は青菜に湯をかけたように弱っていました。小樽に一晩泊って、次の朝暗いうちに割当もらって汽車に乗りました。手宮駅から乗りましたが、駅の近

くは少し前に火事があったといつて焼野原でした。

汽車といっても石炭車にテント掛けましてね、コモ敷いて座ったんです。銭函の海岸では鯨がとれて、箱背負った男や女が沢山いました。札幌を素通りして厚別のあたりで高台で、向うから来る汽車とすれちがいました。おそらく野幌の原始林のあたりだったでしょう。それから岩見沢あたりでまだ雪があったが、巡査みたいな人が五・六人いましたが、それが峰延と美唄に入地した屯田兵で、新しい屯田兵が来るというので、出迎えに来ていたのでした。

小倉の黒い服を着ていたので巡査と思ったのでした。二時ごろでしたか空知川のへりの空知太に着きました。すると江部乙の教育に來て先に入っていた下士官が迎えに来てましてね、そこから年寄りや子供は馬車に乗せられました。私は歩いて今の滝川の四丁目に二十三年に入地した人達がいました。

私達の番号は四四五番でしたので、ここから入れとって本部の近くの笹の刈り分け道を通って番号の家に入りました。

教育するためにまわって歩く下士官を転嫁下士といっていますね、一度内地で兵隊になって上等兵や伍長になったのが、屯田兵を志願して來ていたのがあって、そうした人が班長になるんですが、その他に転嫁下士というのは班長ではなくて、特別に屯田兵の教育にまわって歩く人達でした。

入った晩に土屋軍曹というのが來て、給与品を取りに学校まで來いというので、父と兄と姉とが行きまして、そこで寝具・ヤカン・茶わんなどもらって戻りました。おハチもらって來て、札とハチ

をもって炊出しを取りに来いというので、それをもって事業場という所に行き、その晩の食糧を取りに行きました。黒豆の煮たのとか、鯿の大きいのを家族に一尾づつ、それに豚肉の焼いた大きなのはんとでした。私の家は臨済宗でしたから、獣の肉を食ってはいけないという決めがありましたので、豚肉だと食べれないというので鳥の肉とってだまして食べさせたら、これはおいしいといって食べました。臨済宗は戒律がやかましくて、私の国の村の住職は妻帯しませんでした。

私達の村から八戸も来たということは、二十二年に大洪水がありましたね、その時のいたでが容易に治りませんでした。北海道に行かんかと役場や県庁の方からすすめて来たのです。私の家からは始め希望していなかったのですが、誰も行きませんでした、叔父が話を聞きに行ったら「お前の家の人数では駄目だが、本家ならよいんだが」という話なのでした。そのころの北海道は、今の南米に行く以上でしたから行く気もなかったのですが、役場からも来ましたし、あたりで希望者が出たので、それではと考えたらしいですね。（以下略）

△屯田兵「家族のみた制度と生活」NHK札幌中央放送局・昭和四十三年五月・より▽

江部乙屯田移住者の諸調査

明治二十七年屯田移住者に関する族籍・原籍地における職業類別、教育程度及び募集当時の財産などに関する召募官の調査を参考資料として掲げる。二十七年移住は江部乙歩兵と沼貝の空知への移住五〇〇戸であるが、調査表は四九一戸が集計されている。

第四章 江部乙屯田

(一) 族籍調

府名	平民数	土族数	計	府名	平民数	土族数	計
宮城	二	〇	二	和歌山	四五七	三四	四九一
茨城	六	二	八	徳島	四八	〇	四八
千葉	三	一	四	高知	三一	〇	三一
島根	三	五	八	石川	二四	〇	二四
鳥取	六一	三	六四	福井	六三	〇	六三
愛媛	三七	一	三八	岩手	三二	〇	三二
岡山	六	〇	六	大坂	九	二	一一
大分	一二	一	一三	熊本	六	〇	六
福岡	七一	一二	八三	計	一四	一	一五
計	二一六	二〇	二三六				

(二) 職業調

府名	農業	商業	工業	雑業	その他	無職業	計
福岡	七	二	〇	五	〇	〇	二四
熊本	一四	〇	〇	〇	〇	〇	二四
大分	三	二	〇	〇	〇	〇	三六
山媛	三	〇	〇	〇	〇	〇	三六
熊取	七	二	〇	四	〇	〇	一三
島根	五	〇	〇	五	〇	〇	一〇
葉城	二	〇	〇	〇	〇	〇	二
城阪	二	〇	〇	〇	〇	〇	二
阪手	七	二	〇	〇	〇	〇	二六
井川	二	〇	〇	〇	〇	〇	二
知島	七	〇	〇	〇	〇	〇	七
山歌	三	〇	〇	〇	〇	〇	三
計	四四	八	〇	一四	〇	〇	六六

(三) 教育程度調

甲召募官区域

府名	程度	尋常小学教育	尋常小学卒業	計
福岡	六	七	二	一五
熊本	二	二	〇	四
大分	一	二	〇	三
山媛	六	一	〇	七
島取	三	七	〇	一〇
鳥根	六	四	一	一一
計	二三	二二	二	四五

大島幸衛大尉及び酒出季由大尉が中隊長に任命されている。

中隊幹部及び指導教官となる下士の氏名は次のとおりである。

第二大隊第五中隊

中隊長 屯田歩兵大尉 大島 幸衛
 小隊長 中尉 大岡 勝重
 同 少尉 川上 親興
 同 少尉 大原 武慶
 中隊附下士 曹長 菊地 岩松 同 軍曹 村井源太郎
 中隊附軍医 二等軍医 伊島 謙藏

中隊長 屯田歩兵大尉 酒出 季由
 小隊長 中尉 名越 源五郎
 同 少尉 徳江 重隆
 同 少尉 難波田 憲欽
 中隊附下士 曹長 須田源五郎 同 軍曹 古川 栄藏
 中隊附軍医 二等軍医 堀江 頼信

第二大隊の本部は滝川兵村におかれ、滝川兵村には第三中隊、第四中隊の四四〇戸が二十三年に設置されており、これに隣接して江部乙屯田兵村が置かれたものである。

第五中隊兵卒(入植屯田兵氏名)

住居番号	氏名	出身県	備	考	住居番号	氏名	出身県	備	考	住居番号	氏名	出身県	備	考
441	安藤 龜藏	鳥取	第一給養班	通九丁目	460	今井 由太郎	石川	第五給養班	通十丁目	480	中西 又五郎	鳥根	第八給養班	通十一丁目
445	寺崎 和三郎	福岡	"	"	465	吉野 源一郎	千葉	軍曹班長	"	485	中野 敬作	福岡	"	"
450	石田 源一郎	島根	"	"	470	羽野 棟次郎	福岡	第五給養班	通十丁目	490	角田 熊吉	福岡	"	"
455	楠本 友吉	鳥取	"	"	475	三沢 翼	島根	"	"		中村 芳松	福岡	"	"
	操上 衆藏	鳥取	"	"		吉野 豊一	千葉	"	"		中野 敬作	福岡	"	"
	竹村 二一	高知	"	"		船津 源一郎	千葉	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	山本 政吉	和歌山	"	"		宮内 茂五藏	徳島	"	"		山口 彦八	福岡	"	"
	太田 作松	石川	"	"		川村 次郎	石川	"	"		河村 辨太郎	福岡	"	"
	木下 藤助	福岡	"	"		元村 勝藏	島根	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	寺崎 和三郎	福岡	"	"		渡辺 弥曾藏	福岡	"	"		中野 敬作	福岡	"	"
	安藤 龜藏	鳥取	"	"		替地 浅吉	福岡	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	大久保 小太郎	福岡	"	"		古賀 吉次郎	福岡	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	木下 由也	徳島	"	"		原中 倉吉	福岡	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	林新 助	石川	"	"		加藤 五郎	福岡	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	高橋 藤太郎	高知	"	"		近藤 五郎	石川	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	吉田 初三郎	石川	"	"		津留崎 平太郎	茨城	第八給養班	通十一丁目		武野 惣太郎	福岡	"	"
	山口 武一	佐賀	軍曹班長	"		川村 清	福岡	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	松本 秀七	和歌山	"	"		岩手 清	福岡	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	吉沢 甚之助	和歌山	第五給養班	通十丁目		岩手 清	福岡	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"
	山本 源之助	和歌山	"	"		宮内 茂五藏	石川	"	"		武野 惣太郎	福岡	"	"

520			515			510			505			500			495																			
平尾伊藏	東田松太郎	西井安藏	淺井久我次	高橋市太郎	小島源三郎	山越慶次郎	岡村京松	野尻仁市	加藤三太郎	中田友太郎	吉田健治	鬼頭治	本所久太郎	菅川甚助	宮森元三郎	北永伝兵衛	福島吉太郎	小村為吉	清水庄八	武田信孝	小井龜藏	多田力藏	江上金太郎	榎本勝一	陣副松	池下千松	赤松一	鎌田藤吉	安達又市					
鳥取	和歌山	熊本	鳥取	愛媛	徳島	石川	鳥取	福井	福井	石川	徳島	福岡	石川	岩手	徳島	徳島	福井	鳥取	和歌山	和歌山	高知	鳥取	福井	福岡	和歌山	佐賀	和歌山	島根	岩手	鳥取				
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"				
				第六給養班							第五給養班						東裏通十一丁目			第七給養班			東裏通十二丁目											
555			550			545			540			535			530			525																
奥本実藏	長瀬富次郎	堀部森之助	矢道藏	大川與三吉	安東小一	立石安右門	平山丈太郎	岡藤藤次郎	岡本龜次郎	中島伊吉	中尾信吉	平田音吉	山越浅吉	伊藤沢藏	吉良義人	長田長藏	平沢末松	安田一男	谷下藤吉	木原由松	大塚喜太郎	田原茂	大原久次郎	生野栄一	津川一吉	森定荒吉	地原松之助	大屋四郎兵衛	大村初三郎	野村正喜	西村鹿次			
福岡	愛知	和歌山	鳥取	石川	岡山	和歌山	徳島	福岡	鳥取	鳥根	和歌山	徳島	福岡	石川	鳥取	福井	熊本	高知	石川	鳥取	大分	鳥取	富山	大分	徳島	岡山	鳥取	島根	石川	高知	高知			
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
				軍曹班長							第二給養班			第二給養班						第一給養班			第六給養班			東裏通九丁目			東裏通十丁目					
590			585			580			575			570			565			560																
森下佐五郎	前田熊太郎	中沢吉弥	福井京太郎	城木源兵衛	高源幸吉	寺岡貫之助	三沢與三松	殿江政藏	長江淺次郎	岩橋愛次郎	莊崎秋吉	玉田利作	川部虎吉	矢野千藏	東地丑太郎	森田馬吉	竹崎柳馬	大崎鶴吉	前田龜吉	山腋與四吉	進藤島吉	池田弥壽馬	上村義衛	藤田利一	福住閑次郎	串崎梅一郎	白崎喜市郎	数坂広吉	浅井次郎七	石川近次	三笠松八	木下吉		
和歌山	和歌山	福井	福岡	徳島	岩手	鳥取	島根	徳島	徳島	熊本	福岡	和歌山	鳥根	高知	高知	高知	高知	高知	鳥取	徳島	福岡	高知	和歌山	福岡	福岡	鳥根	徳島	和歌山	福岡	愛媛	徳島	愛媛		
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
				第三給養班										軍曹班長			第六給養班			第六給養班			第六給養班			第二給養班			東九丁目					
西裏通九丁目																		東十丁目			東十丁目			東十丁目										

第六中隊兵卒（入植屯田兵氏名）

番号	住居	氏名	出身	備考
650		越智 吉次	愛媛	
650		小野田 久吉	大分	
650		田中 波一	島根	
650		中島 長太郎	石川	
650		房前 佐助	大分	
650		寺崎 竹次郎	富山	
650		村上 米藏	鳥取	
650		大久保 久太郎	鳥取	
650		藤沢 静雄	大分	
650		山崎 金六郎	石川	
650		紙谷 佳成	富山	第一給養班 通十二丁目
660		平野 熊市	島根	
660		小野田 久太郎	福岡	
660		野上 乙次郎	茨城	
660		佐々木 秀松	愛知	
660		山口 久太郎	愛知	
660		山本 柳藏	鳥取	
660		田村 利平次	和歌山	
660		山本 龜吉	鳥取	
660		浅田 梅太郎	福岡	
660		海田 金一	島根	
660		船津 俊一	島根	第一給養班 通十三丁目
660		岩戸 斧吉	高知	
670		佐藤 啓之丞	島根	軍曹班長
670		実藤 磯五郎	福岡	軍曹班長
670		田中 茂昭	和歌山	
670		辻井 與藏	福井	
670		吉田 元吉	福井	
670		恒本 春吉	福岡	
670		増永 金太郎	福岡	
670		田中 初太郎	福岡	第四給養班 通十四丁目
670		大隈 俊正	福岡	
670		中村 正一	愛媛	第一給養班 通十三丁目
670		林村 正一	鳥取	

番号	住居	氏名	出身	備考
605		東藤 庄次郎	石川	
605		中村 寅藏	福岡	
605		中川 原伍平	福岡	
605		平野 笹市	福岡	第四給養班 西九丁目
605		平塚 進藏	福岡	
605		緒方 貞次	福岡	
605		大西 駒太郎	石川	
605		渡辺 熊太郎	島根	
605		森松 丈太郎	熊本	
605		白新田 恒太郎	福井	
605		野並 長次郎	高知	
605		明地 藤三郎	愛媛	
605		笠松 貞之助	和歌山	西裏通十丁目
605		坂井 兵助	和歌山	
605		黒田 策一	福岡	
605		篠原 富次郎	福岡	第三給養班 西裏通九丁目
605		三谷 安吉	富山	
620		井上 松次郎	福岡	軍曹班長
620		沢木 百太郎	福井	
620		一木 伊太郎	福岡	
620		江口 弥太郎	佐賀	
620		佐々原 一夫	福岡	
620		橋口 年松	鹿児島	軍曹班長
620		安宅 一郎	和歌山	
620		本庄 幹一	福岡	軍曹班長
620		香山 輝夫	熊本	
620		和田 与助	和歌山	
620		平田 太助	熊本	
620		山本 熊市	島根	
620		遠藤 清	福岡	
620		中山 仙太郎	熊本	第四給養班 西九丁目
620		藤村 福松	岩手	
640		水上 養太郎	石川	軍曹班長
640		岩崎 初吉	福井	
640		坂口 与三	石川	
640		北本 為一	石川	
640		中瀬 昌孝	和歌山	
640		井上 龜太郎	福岡	第八給養班 西裏通十二丁目
640		石橋 伊勢吉	福岡	
640		松尾 音三郎	福岡	
640		小川 邦市	島根	
640		上山 弥三郎	福井	
640		大谷 平太郎	大阪	
640		寿美次 権太郎	和歌山	
640		長永 権太郎	石川	
640		大段 種市	島根	
640		堤井 竹藏	和歌山	
640		村井 八百吉	福井	第四給養班 西九丁目

705		700		695		690		685		680		675																			
高井忠太郎	長野岩太郎	虎谷竹次郎	埴平八助	星川半助	早弓菊一郎	森田龜太郎	前田又三郎	河村兵吉	川岸久左衛門	吉田龜藏	石本亥之助	東倉峯太郎	鈴木武三郎	河上金次郎	中野又次郎	杉本菊藏	岩本為藏	山本專多	森本市太郎	石井寅藏	長野岩太郎	石川岩藏	淺田榮藏	原田馬吉	大久保岩吉	三好庄太	田中喜代助	松尾嘉八	宮脇長吉		
石川媛	愛媛	富山島媛	德島媛	愛媛	島取	鳥取	愛媛	富山	鳥取	鳥取	愛媛	愛媛	愛媛	富山	石川	鳥取	鳥取	石川	和歌山	鳥取	愛媛	愛媛	鳥取	鳥取	福岡	島根	福岡	佐賀	福岡		
軍曹班長	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
東裏通十五丁目																第六給養班		第四給養班		通十五丁目											
735		730		725		720		715		710																					
覚元久松	本山四郎	羽柴初三郎	鈴木房一	山崎栄太郎	石川末吉	寺本丹治	鈴木野助	布川喜助	山根榮吉	玉置吉松	窪田金次郎	石川甚四郎	今田孝弼	古川孝藏	小井手熊藏	矢部重太郎	加藤峻藏	月原石工門	森実静一郎	星野養太郎	松田角藏	松田伊三郎	鈴木伊三郎	浜上幾太郎	村上左工門	横林吟藏	村上喜惣治	村井弥門	岩本延藏		
石川根	島川	石川	石川	島根	愛媛	福井	愛媛	福井	石川	和歌山	富山	島根	島根	鳥取	鳥取	鳥取	愛媛	愛媛	千葉	鳥取	德島	愛媛	德島	愛媛	岡山	愛媛	福岡	鳥取	鳥取		
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"		
東裏通十二丁目																軍曹班長		二代良次郎		第二給養班		東裏通十三丁目		第七給養班		東裏通十四丁目		第七給養班		東裏通十四丁目	
765		760		755		750		745		740																					
長谷川竹藏	三好直作	浮穴鶴造	松井仙治	上島周吉	菊地石太郎	稗市吾郎	川上鉄弥	古村銀五郎	須合権吉	河村辰次郎	江口团四郎	伊藤喜太次	淡中盛之助	広田盛太郎	豊丹真太郎	内田恒吉	上坂新太郎	井上八松	北山伝八	亀井勇松	梅野種吉	磯江千代造	溝端岩楠	島田与三松	浜中吉重	長井慶七郎	前田惣七郎	丸岡繁太郎	佐々木徳松	後藤震兒	
愛知島	愛媛	鳥取	鳥取	岩手	和歌山	石川	岩手	和歌山	高知	石川	佐賀	福井	高知	和歌山	福岡	福岡	石川	福岡	福岡	福岡	鳥取	和歌山	福井	和歌山	德島	福岡	德島	石川	福岡		
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	
第一給養班																西裏通十二丁目		軍曹班長		第八給養班		東十五丁目		第二給養班		東裏通十三丁目					
"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"	

東十五丁		第八給養班		東十四丁		東十三丁		二中队 墓地																				
		上島周吉 753	754 松井仙治																									
		稗田吾市 761	762 菊地石太郎																									
		古枝鉄弥 759	769 川上市太郎																									
		空地	758 須合銀五郎																									
		河崎辰次郎 756	757 川村権吉																									
		伊藤與作 754	755 江口国四郎																									
		広田盛之助 752	753 淡中喜太次																									
		内田 豊 750	751 豊丹生真太郎																									
		井上新太郎 748	749 上坂恒吉																									
		亀井勇松 746	747 北山伝八																									
		磯江千代蔵 744	748 梅野種吉																									
		林峰太郎 692	749 溝端岩楠																									
		川岸左衛門 696	前田文三郎 698	早弓菊一郎 700	長野平八郎 702	岩本延蔵 706	村上喜惣治 708			村上基左衛門 710	鈴木伊二郎 712	松田角蔵 714	森實静一郎 716	加藤峻蔵 718	射の場	小井手能蔵 720	今田基四郎 722	窪田吉松 724	山根喜助 726	鈴木丹治 728	石川栄太郎 730	鈴木 仁 732	本山四郎 734	丸岡繁太郎 736	後藤震児郎 738	長井慶重 740	島田三松 742	
		東裏通		第七給養班		二十五戸				第二給養班		二十四戸																
691 鈴木武三郎	693 東倉多之助	695 吉田亀吉	697 河村兵吉	699 森田亀太郎	701 星川半助	703 虎谷竹次郎	705 高井忠太郎	707 村井弥門	709 横林吟蔵	711 浜幾太郎	713 松田松蔵	715 星野養太郎	717 月原全左衛門	719 矢部重太郎	721 古川孝吉	723 石川金次郎	725 玉置栄吉	727 布川松野	729 寺本末吉	731 山崎房一	733 羽柴初三郎	735 覚本久松	737 佐々木徳松	739 前田惣七郎	川浜中吉松			
中野又次郎 689	岩本為蔵 687	森本市太郎 685	長野市太郎 683	浅田栄蔵 681	大久保岩吉 679	田中喜代助 677	宮脇長吉 675	實藤磯五郎 673	辻井與蔵 671	恒本太郎 669	官舎	田中金太郎 667	中村俊正 665	平野熊市 663	野上午吉 661	山口秀松 659	田村柳蔵 657	浅田亀吉 655	船津金一 653	越智吉次 651	田中波一 649	房前佐助 647	村上米蔵 645	藤沢静雄 643	紙谷佳成 641	中隊長官舎		
西裏通		第六給養班		第二給養班		第一給養班		二十四戸																				
680 河上金次郎	682 杉本菊蔵	684 山本専多	686 石井東蔵	688 原田馬吉	690 石川岩太郎	692 三好庄太郎	694 松尾喜八	696 佐藤啓之丞	698 田中茂昭	700 吉田元吉	702 增永春吉	704 林 正一	706 大隈初太郎	708 小田久太郎	710 佐々之次郎	712 松本久太郎	714 山本利平次	716 海田梅太郎	718 山本利平次	720 小野田久吉	722 岩野斧吉	724 中島長太郎	726 寺崎竹次郎	728 大久保久太郎	730 山崎金六郎	中隊長本部庫		
千田仁太郎 819	長野百蔵 817	増野愛人 815	田野丙次郎 813	前田綱吉 811	玉置藤吉 809	小林春彦 807	本下鉄五郎 805	本山鹿太郎 803	右田紋市 801	越智喜代治 799	川村儀蔵 797	岡本岩蔵 795	高田林蔵 793	岡中栄松 791	家納龜蔵 789	助川捨松 787	石井長太郎 785	古井政蔵 783	青木三吉 781	高谷千代太 779	平野桑太郎 777	林竹次郎 775	北村 一 773	小橋徳之助 771	長谷川竹蔵 769	浮穴鶴造 767		
至旭川		第五給養班		第二給養班		第一給養班		二十六戸																				
816 大塚幸次郎	818 高見栄吉	820 田所宗吉	822 石井東蔵	824 武田九郎三郎	826 大崎恒吉	828 齋木延治	830 浜田 一	832 松田儀一	834 德田與三郎	836 越智嘉平太	838 中島辰五郎	796 村上株左衛門	798 大橋政蔵	799 水坂嘉蔵	800 本元竹次郎	801 星川升吉	802 藤原信吉	803 津田田良一	804 嘉蔵	805 江口幸太郎	806 中西長蔵	807 山崎作太郎	808 横田定太郎	809 樋口虎吉	810 安村與三郎	811 芦田末三郎	812 三好直作	
榎本友吉 820	大道寅松 822	上村菊五郎 824	佐藤熊大 826	依岡重太郎 828	福島米吉 830	谷口久作 832	中林栄吉 834	森下弥平 836	岩佐駒蔵 838	小森佐平 839	江幡栄次郎 840	吉岡 竹市 821	西田栄次郎 823	黒田嘉藤次郎 825	千徳與三松 827	吉田與三松 829	長田権次郎 831	大崎国太郎 833	本谷万太郎 835	本吉與平 837								
西十五丁		第六中队		200戸		(江部乙北兵村)																						